

(成果情報名) 露地の山ウド「茨城1号」が簡易に軟白できる株詰め枠と軟白用資材		
[要約] ポリエチレン畦シートで作製した円筒枠を用いる、土寄せ成畦作業が不要で山ウドの軟白が簡単にできる。 また、枠内に充填する軟白用資材は、軽くて扱いやすい「もみがら」が適し、土寄せ土盛り方式の軟白ウドとほぼ同等な品質が得られる。		
(研究所名) 農業総合センター山間地帯特産指導所	成果 区分	技術参考

1. 背景・ねらい

山ウドの露地軟白の方法として、畦間の土を山ウド株に寄せ軟白長の高さに盛り土成畦する方法が一般的に行われており、土寄せ土盛り作業は土の移動を伴うので重作業となることから、これに代わる簡易な軟白法が求められている。

そこで、土寄せ土盛り方式による軟白ウドと同等な品質が得られる簡易な軟白法を確立する。

2. 成果の内容・特徴

1) 収穫軟白ウドの1株からの出茎間隔は8~10cmとなり、また、1株当たりの平均収穫本数は5本前後となるこのことから、軟白用円筒枠の直径は40cmでよい。(表1、図)

2) 軟白処理開始から収穫までの期間、及び収穫ウドの軟白茎径と茎長、一株重については、軟白用資材の「もみがら」と「土」による差はみられない。(表1、表2)

また、軟白した山ウドの茎の硬さ、香り、味などを総合した食味評価点は、軟白用資材による差はみられない。(表3)

これらのことから、軟白用資材として「もみがら」が土の代替資材として利用可能である。

3) 土寄せ土盛り軟白方式は、台形状(上底55cm、下底135cm、高さ40cm)に成畦する(図1)ので、1株当たり0.084m³の土量と土の移動が必要であるが、株詰め円筒枠と「もみがら」を用いると、簡易かつ軽作業で軟白が可能である。(データ省略、図2)

3. 成果の活用面・留意点

1) 県下全域に適用できる。

2) 350g前後の分割株を定植して5年育成した株を供試したときの成績である。

3) 作製した円筒枠を株に充て詰め後、風力で倒れないように棒などで枠を固定する。

4) 「もみがら」軟白化資材は、円筒枠内に高さ35cm(1株当たり4.5kg)充填し、風などによる飛散を防ぐため、「もみがら」上部を不織布などで被覆する。

4. 具体的データ

表1 軟白山ウドの収穫開始日と収穫本数、及び出茎間隔

軟白用資材	収穫開始日	平均収穫本数	出茎間隔
もみがら	4月26日	5.4 本/株	8~10cm
土	4月26日	5.2	8~10cm

注) 供試株は株分け後5年育成株 品種「茨城1号」

軟白開始 2月23日

表2 軟白用資材と収穫山ウドの軟白茎

軟白用資材	茎長(cm)	軟白部の長さ(cm)	茎径(mm)	1茎重(g)
もみがら	33.0	31.6	23.3	105.8
土	34.6	32.3	20.6	88.7

注) 供試株は株分け後5年育成株 品種「茨城1号」

施肥窒素量10kg/10a・茎数2本調整株を供試

表3 軟白用資材と軟白茎の食味官能評価点

軟白用資材	食味評価点
もみがら	2.7
土	2.7

食味評価区分；1・・・悪い 2・・・1と3の中間 3・・・良い(評価；男女12名による)

食味評価点；軟白茎の硬軟、香り、味などを総合した点数で表す



図2 ポリエチレン畦シート円筒枠と「もみがら」軟白資材



図1 土寄せ土盛り台形状畦(慣行法)

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

山間地帯特産作物の天然資源を利用した促成栽培技術の開発・平成13~17年度
山間地帯特産指導所